

Title	錯綜する「知」と「力」：幸田露伴「いさなとり」の可能性
Sub Title	Dialectic of knowledge and power in Koda Rohan's Isanatori
Author	西川, 貴子(Nishikawa, Atsuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 錯綜する「知」と「力」

——幸田露伴「いさなとり」の可能性——

西川 貴子

## 1

かくてある時、かんじす号香港ほんこんに碇泊中、捕鯨船の暴風雨にて痛く破損せし者の入札にまつぼらち払となりしを、百五十ぼんど磅許りにてふんせいむは買取かひとり、無頼ぶらいの支那人つりのを募つりて自ら船長となり大胆にも破船に乗じてべえりんぐ海峡かいけふに向ひ、危険を冒まかして遂に非常の好結果を得てより、又船を買ひ増し人を就やとひ捕鯨船隊なるものを作り、四年程経て七艘の所有船を従へ、(後略)〔「露団々」〕「都の花」明22・2(8)

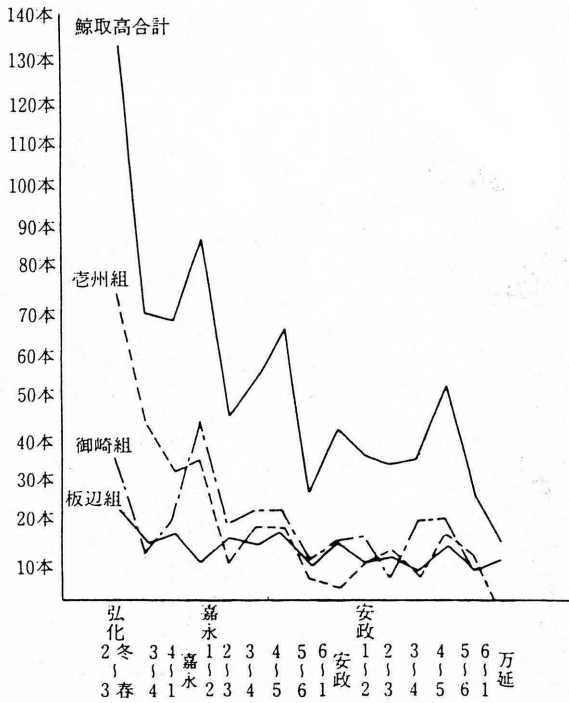
幸田露伴の小説「いさなとり」(『国会』明24・5/19(11/6))にはその題名の通り、捕鯨の場面が描かれるが、捕鯨についての記述はこれを嚆矢とするわけではない。処女作「露団々」にも捕鯨に関する記述を見出せることは、例えば平岡敏夫の「露伴が『いさなとり』を書こうとするとき、『露団々』のアメリカ人ふんせいむ、その鯨とりの半生が想起されていたことは疑いなかろう。」(『殺戮する露伴——長編『いさなとり』試論』『文学』昭50・11)<sup>(2)</sup>という言葉を

初め既に指摘がある。

確かに「幼少の時より鯨取りにでも成うかと思ひし」(『世界之日本』明30・3)という露伴の言葉や「作家苦心談」(『新聲』明34・1/15)の「殆ど一年余りは捕鯨の事を研究しました」という「某文士」の談からも、露伴が「いさなとり」執筆前から捕鯨に対して並々な興味を持っていたことは容易に推察できる。しかしだからといってそれを露伴の捕鯨への関心の表れとしてだけ片付けてしまうことはできない。なぜなら「露団々」におけるぶんせいむの捕鯨と「いさなとり」における彦右衛門のそれとは明らかに異なる点があり、二人の相違点を看過するわけにはいかないからである。

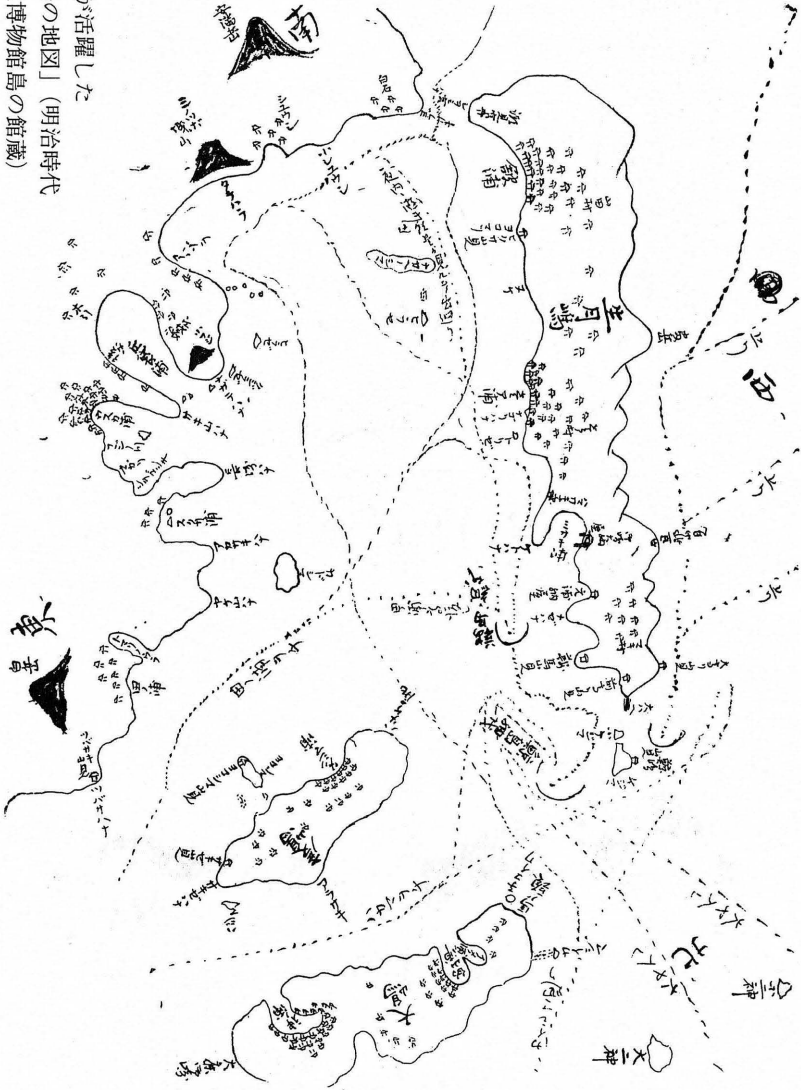
「露団々」のぶんせいむは「いさなとり」の彦右衛門と同じく捕鯨で一大身代を築いた男ではあるが、彼自身に捕鯨技術があつたわけではない。それは平水夫の大部分が他の土地の者であり、「いくつもの捕鯨会社が独立採算で営業し、現場では三〇人余りが捕鯨から解体処理まで担う」(森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版 平6・7)、鋸やポンプランスを使用するアメリカ式捕鯨、沿岸漁業なのである。先行研究でも指摘される通り、松富組は「西海捕鯨最大の経さなとり」達による網取り式捕鯨、沿岸漁業なのである。先行研究でも指摘される通り、松富組は「西海捕鯨最大の経営を誇った」(鳥東京)『西海捕鯨業史の研究』九州大学出版 平5・11)平戸藩生月島益富組がモデルと思われるが、彦右衛門が「いさなとり」だった頃とは、実は益富組捕鯨が衰退し始めた頃なのである(表1)及び(図1) (図2)参照)。そしてこの鯨組衰退の一因こそが「露団々」に描かれたアメリカを中心とした捕鯨船団の日本近海での捕獲による資源量の減少と目されるのだ。このような鯨組の衰退は、明治二十年代日本の漁業全体を象徴する出来事であつたといえる。

〔表1〕「幕末における鯨の漁獲高」〔益富組〕  
 (鳥巢京一)『西海捕鯨漁史の研究』九州大学出版 平成5・11



〔図1〕「北松浦郡函生月島」(明治年間)  
 (長崎県立図書館蔵)

〈図2〉  
 「益高組が活躍した  
 捕鯨漁場の地図」(明治時代  
 生月町立博物館島の館蔵)



岡本信男の言葉を借りれば「造船、鉦工業など一般産業は明治三〇年代までにあらかた産業革命をなし遂げ」たのに  
対し「漁業生産は低位停滞を続け、上昇線を辿るのは大正期に入ってから」（『日本漁業通史』水産社 昭59・10）であ  
り、漁業における近代化は明治三十二年ノルウェー式捕鯨の導入（企業として活況となるのは四十年代初頭）など日清  
日露戦争を経て漸く本格化されるという状況であった。このように漁業の振興が当時重要な問題であったことは、例え  
ば土居茂樹の「水産拡張論」（明24・5/17・18『国会』）によく表されている。近年の主な輸出品（生糸、茶、米、石  
炭）の限界、人口増加という現状を説く一方で「海」を「新富源」と注目し、海外の遠洋漁業の日本近海進出の脅威を  
語ると共に「水産の富饒」が「海軍の資」に繋がること、魚肉の滋養の高さ、魚肥料の有用性など、「我国をして富裕  
国たらしむる」ため「水産事業を拡張する」ことの必要性があらゆる観点から述べられている。そしてそのために「鯨  
の如きも（略）泰西の如く沖捕を主とし銃殺電獲等なさず往々逃逸せしめ却て泰西人の獲る処となる豈に遺憾なら  
ず」と旧来の漁業方法を否定し、「遠洋漁業」への転換（「今我国にありて水産事業を旺盛ならしむるにハ必ずや遠洋事  
業をなさざる可からず」と漁船や漁業方法の近代化を主張しているのだ。

つまり「いさなとり」が書かれた時代とは漁業においても近代化が漸く叫ばれるようになってきた時なのであり、こ  
こに描かれた鯨組による漁業は「過去」のものとして捉えられつつあった、もしくはそれをいかに「過去」のものとし  
るかということが問題となってきた時だったのである。ちなみにこの「いさなとり」の典拠と思われる『勇魚取絵詞』<sup>6</sup>  
が書かれたのは文政十二（一八二九）年であり、「いさなとり」の捕鯨時期とは、ずれている。その一事を考えてみて  
も、露伴がこの時期に、この時代設定で「いさなとり」を書いたことの背後には、単に捕鯨への興味の表れとしてだけ  
処理できない重大な問題があるように思われる。このような時代背景のもとで書かれた「いさなとり」とは一体どのよ

うな作品だったのだろうか。

2

作品内には二つのベクトル——物語現在の時間進行に沿ったベクトルと、彦右衛門の過去の遍歴を語るベクトル——が存在しているのだが、彦右衛門の過去の物語は次のような言葉から語り始められている。

我彦右衛門幼少よりの我侶三昧、十四の春下田の港を飛び出せし時の心持別に何といふ事はなけれど、男児一匹をとこいっぴきもなく草木と共に腐つて仕舞は厭なり、何にもあれ勝手な事仕散しちらして呉れむ、かゝる田舎に唯生れて唯死ぬは少しいまく忌々しい心地こころちのするが無理ではあるまじ、此世の尊たふとい所と人の云ふ京都きやうと、此世の華美はでなところと噂は万人一様な江戸も見ず唯此まゝに果はてることの口惜くちをしさ、(後略)(第十四)

下田出奔当初の彦右衛門にとって、京都は一見したい土地だったが、同時にそこには「男児一匹もなく草木と共に腐つて仕舞は厭」という気持ちもあり、「片田舎かたのなかに果はてやうより何しても都会みやこに身を置き我が器量きりやうだけに世を渡りたくおもへる事」「一端出し家へ仕出来しでかしたこともなく帰るは厭な事」「第二十」を佐十郎に語る彦右衛門の中では「我が器量きりやうだけに世を渡り」何かを「仕出来し」得る場として京都がイメージされていたといえる。但し、そのような気持ちはあっても「何処いづにもあれ奉公したく思ふよし」を語る彦右衛門には、「我が器量」とは何かなど具体的な考えはなかった。しかし言うまでもなく京都という土地には「文化」「伝統」といった一種の類型化されたイメージがある。広瀬旭莊『九桂草堂隨筆』(安政二―四年)に「京ヲ見サレハ。我邦ノ百王二姓。万国ヨリ尊キヲ知ラス。」と語られるなどその例は枚挙に暇ないが、「いさなとり」における京都もまた「人通りの餘り多き家並美しく千門万戸透間なく立連ねたる

賑はしきに、田舎育ちの胸を撲たれて兎角の分別も思案もなく唯山樵の仙境のまぐれ入りたる心地なし」(第十六)と語られるなど、そのような〈記号〉を抱え持っている。また彦右衛門の奉公先、染屋井桁屋とは『東海道中膝栗毛』(文化元々六年)の「京の着だをれの名は、益々西陣織元より出、染いろの花やぎたるは、堀川の水に清く」という言葉の通り、極めて〈京都的〉なものであった。

この井桁屋の設定には「第二十二 お俊伝兵衛はむかしお俊庄兵衛はめでたし」という小見出しからも、浄瑠璃「近頃河原達引」の井筒屋や、三瓶達司(注3参照)が典拠と指摘した馬琴『句殿実実記』(文化五年)の呉服問屋井筒屋からの影響が考えられるが、「水の詮議」で「今出川口向ふの柳の辻」に移転するなど、作品内では染屋であることが強調されている。そしてそこには例えば、「病人ながら流石粋な老父殿、職業染屋だけに色の訳知り情知り」、「駒鶴めが吉三と顔見合して我が野暮を笑つて居るやうおもはれ」(第三十)、「小意気になつて其所等の女に仲好をこしらへ」(第三十二)など、「粋」「意気」「野暮」という価値基準が存在していたことがわかる。

「文字」はこうした京都町人世界の「文化」「伝統」を支えるものであり、作品内の京都で明らかに「無筆」であるのは彦右衛門以外ない。従つて「我が器量だけに世を渡」ろうとする彦右衛門が、京都の次に目指すのは「身体大きく力量も強し」ということを生かして「一人前の男」となれるような場(「我も今年十七、身体大きく力量も強し、何をしてなり一人前の男となれぬことはあるまじきに、いつまで無益に日を送るべき」(第四十八))としての生月であつた。そして、この時彦右衛門は「書ける腕持たば一筆、(略)何所へなり記し置きたきところなれど」(第四十九)と初めて意思表現手段としての「文字」の欠如を実感するのだ。「文字」の必要性が京都を去る時に初めて意識されたといふことは注目に価するだろう。こうした表現手段としての「文字」とは相手が読めなければ意味がないのであり、京都



が「文字」教養を当然とする空間であることを彦右衛門は初めて思い知らされるのであるからだ。

顯昭の和歌を引きながら語られる京都から広島への道行もまたそのような自覚を促すものであり、「到底此齡まで文字さへ知らぬ我が、巧みに綺麗に樂して世を經身を立てること覚束なければ、稟て生れし膂力を使ひ腕を使ひ、土方なり漁師なり何でも其様な働きて一生を過ごすべき願望」「第五十三」を持つ彦右衛門にとって、広島が「地獄にもつかず極樂にもつかずと云ふやうな土地」「第五十九」であるのは当然であり、彦右衛門は広島を出奔する時も「我幾箇かの字を知らば書置きすべきに口惜」「第五十九」と「無筆」の悲しさを実感する。広島算盤屋は京都の延長であると同時に、「文字」を使う世界を否定し、それに代わる「稟て生れし膂力」を使うことのできる場への志向をより鮮明にしたといえる。

### 3

「いさなとり」執筆からやや時代は下るが、露伴は「海と日本文学と」(『海』明33・7)で「四囲皆海」で「都市もまた海岸線に多」という地形にありながら日本の文学には「作者が海に對する恐怖心の外には、海に関する記事中に於て見出し得べきものは無」く、特に平安朝以来「真実らしき状態を描きて海上の光景を讀者に感じ知らしむるもの」が無いと述べている。ここで「海」という空間が平安朝以降の日本人、特に「都府の住者」にとつては「恐怖」と「迷信」の場、即ち異質な空間として捉えられていたという指摘をしている点は重要だと思われる。京都で惣五によつて語られる生月という場所は、京都にいて「大津より東方大坂より西方へは足伸したことなき」彼ら(都人)にとつてまさにそのような「一向当りもつかぬ」異域なのである。

馴れし京とは格段の相違、男児はいづれも筋骨太く逞しく言葉つき荒く声大きく、仮初にも弱々しく柔和といふことなければ、京にては強い方なりし我儕をさへ上方訛りの物言振り手緩きに嘲み笑ふ程、婦女さへ其地の者は随分気荒らかに媚めかしい様毫無い位にて、一鳥皆鯨鯨に名高き松富といふ豪家の蔭に立ちて世を送るやうなもの故、自然活物も活物然も活物中では一番大きなものを相手にして其油に食ひ其筋骨に衣るより、兒童までが鉛の真似して棒切ふりまはす遊戯れ事、村中一体雄々敷活気ありて愚凶々々と其日を送るものなし、(後略)(第四十

二)

惣五の眼に映った生月の「婦女」は「気荒らかに媚めかしい様毫無い」ものであつた。しかし彦右衛門にとつては、お新は「姿きり、と腰付やさしく」「柔和き女の情」(第六十九)とあり、「媚めかしい様毫無い」ということはない。つまり同じく罪を犯して生月へ逃亡した者でありながら、京都へ帰り「油屋営業」で成功していくなど、惣五(無論「文字」教養がある)の眼差しはあくまでも京都者のそれなのであり、彦右衛門とは出世の仕方も異なっている。そもそも主人への「紹介の状」を持っていた惣五は「ごろく遊んで居よ」と言われており、働く必要など無かつた。だが、村の「雄々敷活気」に触発され、働き口を頼むが「海は遊興に堺住吉あたり見たほか知ら」ないため「船の上の働き飛沫浴での仕事」はできず、「納屋方」として「日傭」から「若衆」「帳役」「斤量取」へと出世していく。

一方、彦右衛門は自ら進んで「沖場」の生活を選択する。下田育ちの彦右衛門は、権左衛門に「若いの汝は下田育ちと云ふからには浪にうねる船の上歩るかぬといふほどでもあるまいに(略)我の下につけて水夫にしてやらう」と勧められ、「水子」から「羽指見習ひ」「羽指」「親父」へと出世する。「真実職業ある身体となり」という表現からもわかる通り、染屋や算盤屋は彦右衛門にとっては「真実」の「職業」などと言えるようなものではなかつた。だからそれらの

職業場面はほとんど描かれていないのだが、ここでは「金剛力士」「血交りの滴額を染め、見るから夜叉の相好」(第六十七)などと表象される「へいさなとり」達の「殺気海を掩ふて浪湧き風腫し」といった捕鯨場面が詳しく描かれ、「勇ましくもまた勇まし」と讃えられている。「複雑かつ特異な組織で」「順位は捕鯨技術の優劣と社会的格式によって決ま」(森田前掲書)る実力本位の「へいさなとり」の世界こそ、彦右衛門が求めていた「稟て生れし膂力を使ひ」「一生を過す」ことができる場だったことは明白だ。

従つて京都や広島で彦右衛門が評価されていた「伶俐」さや、「額は尚くつきりと白く両の頬あざやかに紅潮さして、張のある眼つき通りたる鼻筋、きり、と締りたる口元は男に惜しい愛嬌」(第三十二)という容貌は生月では影を潜め、代わつて「骨組がつしりと肉緊り筋強く、潮風に吹き黒められ日の光りに照り黒められて、桃色なりし顔の色赤黒くなり、眼ざしも自然鋭くなつて天晴立派の男とは誰が見ても云ふべき恰服」(第六十六)が強調され、継母の「阿諛」も彼の「力量」や「俠気」に向けられている。

また後に彦右衛門と横浜で再会した時、三次の言った「よしや居どころ了つたにせよ其頃はいろはのいの字を牛の角の形ともおぼえざりし位の我無筆なりし故何することも出来ざるべきが」(第九)という言葉から、三次は生月の「へいさなとり」であつた時分は「無筆」だつたことがわかり、作品内では「沖場」の「へいさなとり」の社会は「文字」とは無縁な領域として描かれている。

殺人を犯し生月を出奔した彦右衛門は、「異郷」朝鮮を経て壹岐で松富の隠居と再会し、再び「へいさなとり」の世界へ戻っていく。そこは、松富が語るように殺人の罪(「姑殺しの大罪」)さえも「汚穢い動物」三三正殺したは当然の事「誰に聞かしたとて汝が道理」(第九十二)と正当化されてしまう場であつた。彦右衛門にとって、確かに壹岐の

へいさなとり」の世界は生月のそれとは「為ることは異らぬ鯨魚取ながら持つ心は往時に異なる柔和三昧」(第九十三)と変化はしている。しかし結局再生の場として「へいさなとり」の世界が選ばれ、最終的に故郷に「何か」を「仕出来し」帰るという下田出奔以来の望みを果たした場としてそこは存在していた。だが「へいさなとり」の世界を出て再び広島、京都へ向かった彦右衛門はまた「無筆」の悲しきを感じざる得ない。惣五と再会し、お俊に手紙を書くことになった彦右衛門は、初めて「代筆」という形で間接的に「文字」を使うが、「無筆」である以上、「他に憚ることなくおもひきつて」自分の意思を伝達することはできず「忸ち入る」。

このように彦右衛門の過去の旅は、ある意味では職の遍歴、自分の力を生かせるトポス探しの旅であった。彦右衛門はこの旅を通じて、表現手段としての「文字」の欠如、「文字」文化への劣等感、と同時にそれに変わるべき「力」への意識を高めていくのである。だが、「へいさなとり」の世界を出ることで再び「文字」の必要性を強いられた彦右衛門は、またそれに代わるべき「何か」を手に入れなければならなかった。

4

開けたる世に文字知らざるは、宝の山に風呂敷持たで金銀瑠璃碑礮拾ひかねたる心地すべく、面白い事の半分は取り得ざる口惜しさ如何ばかりならむ。(略)人の分別の行き方は妙なものにて自己が文盲の口惜しきよりか、我は到底今更望なけれど其代りに娘をと口癖のやうに云ふて、お染が六歳七歳の頃より読書励ますこと大方ならば、十三の春に村の学校早くも卒業させて自慢の鼻高く、好むまに「学問の事とし云へば失費を惜まず、物の本など買ひ求めて遣るに、(後略)」「第二」

へいさなとり」の社会を出て、蓮台寺村で「安心閑居」している彦右衛門にとって、お染はいわば「自己が文盲」を補完してくれる存在だった。だが、ここで初めて「学問」という言葉が使われていることに注意したい。これは彦右衛門の過去に向かうベクトルにおいては使われていなかった言葉である。彦右衛門が明治維新を迎えたのは壹岐にいた時と推定でき、<sup>(9)</sup>ここで彦右衛門が求めていくものとは、表現手段としての「文字」だけではなく、「開けたる世」の「学問」でもあったことがわかる。

周知の如く、明治五（一八七二）年の「学事奨励ニ関スル被仰出書」は「学問ハ身ヲ立ルノ財本共云べき者ニシテ、人タルモノ誰カ学バズシテ可ナランヤ。」という語に示されるように「財産、地位などの社会的価値が個人の資質と努力に依りて配分されるという」「機会の均等原則を前提にして、立身出世主義を煽」る（木村政伸『被仰出書』の理念と民衆）『近代日本における知の配分と国民統合』寺崎昌男編 第一法規出版 平5・6）ものであり、ここでいう「学問」とは「身も独立し家も独立し天下国家も独立すべき」（『学問のすゝめ』）ものであった。「無筆」ゆえに、へいさなとり」となって殺人の罪を犯し「異郷」を「漂泊」するなどの遍歴を重ねた末、そうした過去を秘匿して生きる維新後の彦右衛門にとって、こうした「実学」の思想は容易に受容することができたのではないか。また明治二十一年の市制町村制の公布や、明治二十三年十一月の国会開設などによる「豪農」や「地方名望家」の行政参加という状況が出てきたこともその背景の一つになっていると思われる。勿論、余生を楽しんでいる彦右衛門が行政に参加しようとしていたとは思えないが、少なくとも傍からは「豪農」と思われ「用水堰の修復、土橋の架替、鎮守の宮の屋根葺などにも進んで出銭をはず」（第一）むなどして社会と係わっている以上、「無筆」であることは勿論、「学問」を持たないことへの劣等感強いはずだ。

彦右衛門が「学問」を求める背景には以上の事が考えられるのだが、そのため彦右衛門はお染に対して「学問」の上では性差を設けていない。お染の母がお染に裁縫をさせようとするのを見て、彦右衛門は次のように言っている。

怪しからぬ事、学問を為せやうとはせて縫針など習せて何になる、と叱り付、(略)学問といふものは何様事まで届いて居るか知れぬ、縫針などはあまり詰らぬ事故書には無いか知らぬが、書と云ふ者は難有いもので何でも読みさへすれば分るが不思議、その書を読むことを廃めさずるとは言語同断、汝も文盲ではないか、文盲の癖に娘の学問を妨ぐるとは怪しからぬ、染や縫針などは知らないでもよい、此齢になるまで彦右衛門縫針知らぬで恥かいた事はない(第二)

彦右衛門にとって「学問」とは「何様事まで届いて居るか知れぬ」もので、特にそれは「難有い」「書と云ふ者」を「読む」ことによって得られるものであり、これに対して「縫針」とは「あまりに詰らぬ事」なのである。「此齢になるまで彦右衛門縫針知らぬで恥かいた事はない」という言葉を彦右衛門が発した時、お染は彦右衛門にとって「自己が文盲」を補完する存在として捉えられ、そこには性差という觀念が排除されているのだ。このような彦右衛門の「学問」内容に対する考え方は、女子の学齢児童就学率が男子の半分以下で、「学問」内容においても性差を強調する女子教育が主張され始めていた当時の状況と比較してみると些か変わっていることがわかるだろう。

単純に図式化すれば、この時期の女子教育論は『女学雑誌』に代表されるものと『女鑑』に代表されるものとの二つを主流とみなすことができる。『女学雑誌』は女子の地位向上を第一に「凡そ女性に關係する凡百の道理を研窮する所の学問」(『女学の解』『女学雑誌』明21・5/26)として「女学」を推進し、例えば女学生に対する「生意氣」という批難にも「おのれなるもの具はつて、物の是非明かなるに依て進退誤たざるの類は即ち生氣あるものにして、世人の説

くところの生意気なるものと相隔るや遠し」(「生意気論」明23・11/29)と反論し、女子が学問を学び、「時事を談じ」ることの正当性を説いていく。

他方『女鑑』では女子の学問を家政に限定していく。例えば高津鋏三郎は「女子教育の要旨」(『女鑑』明25・1/5)で生来「体格」「徳性」「能力」において男女差があるので「女子には、主として、人の妻たるに適せしむべき」「家内を治むる」ための教育をすべきだと述べ、「苟も、中等社会の妻たる者、眼に一丁字を知らざる程の無学にては不都合なれども、大なる学識も、また平生不用なり。(略)女子の学は、普通文を読み書きし、加減乗除を能くするほどなれば、人の妻として事足りるべし、それ以上の学識は、あるに如くはなけれども、なきとても不都合なかるべし。食物を調理すること、衣服を裁縫することなどは、女子の知らで叶はぬことなり。」と主張している。だが、いずれも性差という現状がまず前提となっており、それはあくまでもへ女性のための学問であった。しかし彦右衛門が求めているのは「学問」であり、性差に基づく「女学」といった観念は持っていなかった。

「夜に入りては無筆の彦右衛門夫婦例の通りお染に、郵便で来し新聞読ませて愉快気に聞き居けり。」(第一)とあるように、新聞を読んで聞かせることはお染の日課であり、彦右衛門はお染を媒介として新聞や書の中の「面白い話し」を知る。しかしそれはあくまでも彦右衛門が「何といふ分別なく伝手あるまま縁あるま、買ふて買」ったものの中でお染が「唯おもしろしとおもふ所のみ我俣に読み散らし」たものの一部なのであり、彦右衛門はお染というフィルターを通して以上、お染の興味の限りにおいての知識しか得られない。しかもお染の「澁みなき声」や「新聞の数多く購るも彦右衛門の家、雑誌の数多く取るも彦右衛門の家」といった「陰の評」(第二)を聞いて喜んでいる彦右衛門がそれをどれだけ理解しているかは怪しいと言える。

磯貝と副艦長の何某との談話はお染には大概分れど彦右衛門の耳には遠く、彦右衛門は又談話の透さへあれば無慮にも副艦長捉へて船の講釈ばかり五月蠅ほどに問懸るに、是はお染磯貝には一向おもしろからず〔第七〕

従つて彦右衛門とお染との間には「学問」をめぐつて明らかに齟齬がある。勿論、物語世界内では、お染は磯貝という「良き智」と結婚し、彦右衛門のもう一つの欠如である「家統すべき男子」を得させるといふ役割も果しているのであるから、彦右衛門にとつてはまさに「めでたし／＼」といふ結果を導いてくれる存在である。だが、それはあくまでも彦右衛門の「道理」の中においてである。

女学雑誌の巖本さまといふ方にもお目にかゝりたけれど、是は例の父様の癖にて男に口をきくは御嫌ひなさるべければ及ばず、其を不道理といふことは知れど父様に逆ふことは厭なれば仕方なし〔第三〕

東京横浜見物に行く前々日の夜、お染が胸の内語つたこの言葉は重要な意味を持っている。彦右衛門にとつての「道理」を「不道理」と語つてしまふお染は、この瞬間、彦右衛門とは違ふ「道理」——それは「齢の有つ智恵に雑書が添へたる智恵が様々に働きて」と語り手が語るように新聞や書で知り得た事が背景となつていふのだが——を持つてしまつてゐるからだ。

そもそもお染には最初から二つの事が同時に期待されていた。一つは、「疾生長せよ、良き智取らせて孫生まれ、初孫の顔見て我世を終へんと、唯そのみを楽しみにして老後の欲を一つに堅め」〔第九十九〕と語られているように「良き智取」ること、即ち「家」の安泰繁栄であり、もう一つは先述の通り自己の「文盲」を補完することである。ここには既にある種のずれが生じてゐる。

熊谷開作『日本の近代化と「家」制度』（法律文化社 昭62・5）は、この時期の「家」が従来の「儒教的『家』制



度」(同)を有したものである一方で、最終的には「国家」に連なる形で「権力機構の末端に位置」するものと述べ、更にこのような「儒教的『家』」を説く反動イデオログ」は、明治十三年の改正教育令の実施、明治二十三年の教育勅語などの「修身教育重視の風潮」の中で定着していったと指摘している。「家」を重視していくこうした考え方の中では当然女性には先の『女鑑』などで提出された「家」を守る良き妻良き母としての役割が期待され、そこでは「男子の如き高等の学問」は「貞淑謹慎の婦徳を薄弱ならしむる」(『女子教育所感』『女鑑』明25・1/5)と排斥されていく。しかし「無筆」の彦右衛門は「学問」をすることによって女性が「生意気」になることなど全く考えていない。日常においては「女性」としての役割を期待していながら、「学問」に関する時のみ「性差」を排除していくという彦右衛門の態度——お染の疑問はそこに発しているのではないか。

作品内では語り手及び彦右衛門によって、女性は「流石女の心弱く」(第四十五)「女だけに情ある別れの言葉」(第四)「流石に女気のやさしく」(第三十六)「女だけに胸狭く情遍れば」(第八十)と語られており、「心弱く」「やさしく」「胸狭く」「情ある」ものと規定されている。そしてこのように規定されるべき女性が「女らしさ」の規範から外れ、お俊やお新のように姦通などの形で一種の身体性を持つて立ち現れてきた時、今度は「諸悪の根源たる婦女」とされるというもう一つの構図がそこから読み取れる。

そしてこうした「諸悪の根源たる婦女」とは一線を画する女性として出てくるのがお染の母であり、お染なのだ。お俊やお新が「利発」(お俊)「小機転も利」く(お新)とされ、容貌も美しい女であったのに対し、お染の母は「容貌さのみ美しといふにもあらねど才智勝れたりといふにもあらねど学問ありといふにもあらねど、唯女らしき女なりといふだけは確実なりと聞出し」(第九十七)とあるように「容貌」も「才智」も特に持たない「唯女らしき女」として選ば

れている。この「女らし」とは「今の女房は村で貰つた正直一遍の者」(第十)「貞淑おととき女を彦右衛門に添はせんと」(第九十七)という表現から「正直一遍」「貞淑」さにほかならず、「唯女らしき女」とはそうした規範から決して外れることのない女性として語られ位置づけられているのである。従つて「温順すなほの質たちとて之これを嫌はざるどころか却つて悦よろこび」「柔順すなほの心より母の命いのち令露背せむかす」(第二)「静淑しづかなる性質もろまへが自然と為きする勉強べんきやうに」(第九十九)など「温順」「柔順」「静淑」と再三語られるお染もまた、一見語り手の語る物語論理(女らしさの規範)の内に回収されてしまうかのように見える。

しかし先述した通り、お染と彦右衛門の間には明らかに齟齬そごがあり、お染は彦右衛門の「道理」に対して疑問を持っているのである。この彦右衛門の「道理」とは、単に「男に口をきくは御嫌ひ」ということに止まるものではないだろう。なぜならそこには他人には「是ばかりは分からぬ」と思われてしまうような「男女なんによの間の婀娜あだめかしき事は毛虫より嫌」う彦右衛門の過去のベクトルにおいて獲得された「道理」が根底にあるからであり、それはあくまでも彦右衛門と不可分の語りをなし「禍福くわふくは糾あざなへる縄の如くなるべきも縄は定きまれる理ありて成る、豈あにいたづらに慶殃けいあうの生ずべむや。」(第八十九)などと盛んに世の中の「理」「道理」を説く語り手によつて語られる物語世界を貫く論理とも繋がつていくものだからだ。従つて齟齬を感じつつも(またはその事に無関心で)「我が知らぬ道理さへ時には云ひ出づることあるにぞ愈々嬉し悦びて」(第九十九)と「嬉し」という彦右衛門と、これに齟齬を感じ「不道理」と認識してしまふお染との間には越えがたい溝がある。

また作品内で示されるお染の「学問」の具体的内容とは、「裁様」という女性の学問や草木の実を結ぶ訳、上野黒門の由緒、電気燈の訳、新聞の記事、「磯貝と副艦長の何某との談話」を共有できる程度の知識、「女鏡」「女学雑誌」な

ど、非常に雑駁としており、こうしたお染の知識は、「学制」下で提唱された「実学」とも、先に見たような『女学雑誌』や『女鑑』の主張に沿ったものとも違うなど、どこかずれており、しかもそれが認識のレベルでどの程度内面化されているのかは必ずしも明らかではない。そもそも作品内でお染の内実が語られる部分は非常に少なく、その中でもお染は「何見物しても美しいとか立派とか精巧とか其場に云ふ限り別段深くかんじはせざる如く」「何方でも無き様子、数々の雑書買ふて貰ふてこれを悦ぶのみなり。」「第五」など「せざる如く」「無き様子」と語り手に曖昧に語られてしまっている。だが先述した通り、彦右衛門の「道理」を「不道理」と言う瞬間を持ち、また巖本に会いたいと言い、上野図書館の目録や書物に多大な興味を持っているなど、それが全く内面化されていない浅薄なものとも取れないのである。

「思想に対して知というのは、イデオロギー的により中性であり（川村肇「在村知識人の儒学知と民衆の学問観の転回」『近代日本における知の配分と国民統合』前掲）、「非体系的で自らを拡大する傾向を持つ」（同）つ。「知は思想から得られたものであるにもかかわらず、その母胎をさえ解体する可能性」を有し、「一般的には開かれたものとして拡大していく」（同）傾向がある。お染の「知」とはそうした「思想」によってイデオロギー的に統合されたもの、同時代における「立身出世」の体系に組み込まれるたぐいのものではなかった。それは無秩序で雑多であるが故にそうした「知」と社会性と権威のメカニズムを逸脱していく可能性を秘めている。父とは異なり「文字」教養があるお染は、一見「温順」という枠内に固定されている様に見えるものの、その「学問」と同様に内実が多義的なままに提示されることよって、かえって父彦右衛門を超え得る可能性を内包しているといえるだろう。お染はいわばそのような境界に位置しているのだ。

谷崎潤一郎は「饒舌録」(『改造』昭2・12)で「露伴の文章は古典の趣味が豊富であつたので、読みながらその出典を考へるのが一つの興味であり、たまたまそれを捜しあてると、自分もたいそうな学者になれたやうな気がした。」と語っているが、他の露伴の文章と同様、「いさなとり」にも「古典の趣味」は多く見られる。

作品内ではお染の婿取りと、彦右衛門と新太郎の父子再会譚を縦軸に、彦右衛門の過去の物語が再生されていく。例えば彦右衛門と新太郎の父子再会の伏線として、佐十郎と惣五の父子再会譚があり、そしてお俊の、夫の放蕩による妻の墮落(姦通)という型が、今度は夫伝太郎の放蕩による離縁、彦右衛門との再婚、昔の夫との姦通という形で、お新と伝太郎の姦通へとずらされていく。お俊と彦右衛門の姦通話で酒の上での姦通というモチーフには、例えば近松の「堀川波鼓」(宝永四年初演)などが、一度濡れ衣を着せられてからの姦通というところには西鶴『好色五人女』(貞享三年)巻二などが影響しているのではないかと思われる。この他にも、義母(父)の婿(嫁)への懸想という型としてお雛の母と銀次郎、伝太郎の父とお新の話が挿入されるなど、様々な類型化した物語が入り交じっており、これらは先述したように盛んに「道理」や「因果応報」を説き、物語の意味付けをしていく語り手<sup>(10)</sup>によって最終的には「めでたし〜」とまとめられていく。

このように『勇魚取絵詞』、司馬江漢『西遊日記』(『西遊旅譚』<sup>(11)</sup>)、西鶴『日本永代蔵』(貞享五年)巻二ノ四「天狗は家名の風車」などを素材としつつ、先述したような類型化した様々な物語によって構成され、「めでたし〜」という図式に収まる「いさなとり」という作品は物語構造それ自体が「古典の趣味」によって枠どられているといつてよ

い。しかし、これまで述べてきたことから、この作品がこうした「古典」的物語の枠に完全に回収されてしまうような単純な物語ではないことは明らかだろう。ここには「めでたし〜」と語られる物語世界から突出していく、それだけに異質な存在——彦右衛門の「へいさなとり」の世界とお染の「知」の領域——が内包されているのだ。

彦右衛門が「文盲」ということに異常なほど、劣等感を持ち、お染に「学問」を託していく背後には「へいさなとり」としての過去が反映していた。また生月の生活を「憶ひ出しても慄然とする」(第十)「罪深い鯨漁り持ぎ」と語り、過去を想起し苦悩する彦右衛門にとって、「へいさなとり」の世界は生月での殺人とも重なってくる忘れ難い記憶でもあった。だがそれは「罪」と否定されるべきものとしてだけ存在していたわけではない。

坐頭鯨の児を愛して児に引かれ寄り我が身失ふ態見ては、徐に我が生計の無慙に酷きを思ふことあり。今までは何とも感ぜざりしことに子を持つてより幾度か感じて、(略)我乍ら女々しうなりしと氣のつくほど分別の老けるが、(後略)〔第七十七〕

「金剛力士」「夜叉」と表象された世界は、ここでは彦右衛門に「無慙に酷き」「生計」と捉えられ、一方でそのような考え方は次の瞬間「女々し」いとも否定されていく。つまり鯨取りの殺戮行為とは「勇ましくもまた勇まし」(第六十七)いものであると同時に「無慙に酷き」ものでもあるなど、既にこの時、二つの相反する意識が表裏一体となって彦右衛門の中に存在していたことがわかる。このような二つの意識の混在は彦右衛門がお新達を斬り殺した時により顕著に見ることが出来る。「半分は奸夫の鯨の骨剝斧を揮ふを見て狂気になり、一切夢中にて心よく三人を打ち殺し」(第八十二)、「後脳打ち割られて俯し居るお新」や「婆が首の領にかけて七分まで切れ居る」姿を見て「さても気味のよい死状なり」と「愉快におぼえ」(第八十一)、新太郎まで捻り殺そうとする彦右衛門には、この殺人行為は「道理の人情

のと面倒な手續い詮議」など全く関係ない「無法無敵無遠慮」な「愉快」さえも伴うものなのである。勿論これはその後ですぐに「罪」と捉えられていくのだが、しかし同時に「罪」という意識をも超えてしまふ瞬間が彦右衛門にはあるのだ。「罪」の意識に苛まれ自殺を企てながら、それも「憎きお新に彦右衛門首を与つたも同然」(第八十)と憎悪を募らせ否定し、また朝鮮では「爽快した男児と他にも云はれ自分でもおもふて居た彦右衛門が、病人か女子のやうなる哩」(第八十九)と「女子」の様な自分を自嘲する一方で、「我を無理に意地張りのなまじひに俠客くさくした奴等」を恨み、今度は自己の「俠客くさ」さを呪うなど彦右衛門はこの二つの意識に引き裂かれているといえる。

そうだとすれば、ある種生々しい「力」の感覚は、「堪忍」「忍耐」して以前の荒々しい「いさなとり」の世界へ向かうとする気持ちを抑え(池月に居た時分の彦に復りて芥子粒ばかりの汝等が胆玉驚かして呉れむと湧上つて来る癩癩抑へ)(第十)、蓮台寺村で安樂に過してしている現在でも、「罪」の意識と表裏の関係を伴って彦右衛門の中に蘇つてくるとみてよい。

物語が現在、過去、現在という順で語られていくことによって、彦右衛門の過去の「いさなとり」の世界は前景化されていく。特に三次は彦右衛門の意識を過去に向かわせる一つのきっかけとして存在しているが、その三次の手紙(荒磯大尉の素性について)が、結局彦右衛門に届かぬまま、「めでたし／＼」という結果が他の次元(お染の存在)から導かれ終結していくことに象徴されるように、彦右衛門の「いさなとり」の過去は、「めでたし／＼」と語られてしまふ表層の物語世界とはまた異質なものとして、未解決のまま残されているといえよう。

このように「無筆」である彦右衛門の中では「文字」という(制度)と自身の生々しい「身体」が交錯する瞬間があり、そうしたある種生々しい「力」の感覚はその中で異化されていく。と同時に娘に「学問」を託していくという「ね

じれ」も生じていく。また更にそこに先述したお染の多義的な「知」が提示され、それらは一層複雑に絡み合い、作品内では「知」と「力」が幾重にも錯綜しているといえよう。この「知」と「力」が錯綜する姿が、決して一義的に定義されることなく、異質さが異質なままに包括され、それぞれに広がりを残したまま一つの作品世界が生成されている点にこそ、この「いさなとり」というテクストの持つ豊かさ、開かれたテクストとしての可能性を見出すことができるのではないだろうか。そのことを考える時、「いさなとり」連載直前にあたる明治二十四年三月青年文学会の講演（本箱退治）での露伴の発言は示唆に富んでいると思われる。

其れでは文章は何所から来るべきか、矢ツ張り分らぬ。今日では到底私には分らぬが、併し何か考へて見るに本箱を打毀す事を一つの趣旨として然して自分の胸中にある垣根を打毀し、然して広い所のものにしたらば、茫漠として分らぬ所に却て無偏無私の立派な文章が出来やしないかと考へる。（略）須らく境界は無くして仕舞はなければならぬ、何でも詩にもあれ文章にもあれ総て含んで、……只境界を無くすると云ふ事が詩を作り或は文章を作る第一の点だらうと云ふのが私の卑見であります。

明治二十三年七月逍遙に宛てた「地獄谷風流書簡」で、それ以前の自分の作品を「妄想」と否定し「妄想撲滅にあらずんは無茶ならざる小説はならず」と述べたこの時期の露伴にとって、「文章を作る」ということは「境界」を無くし、「広い」「茫漠として分らぬ」世界を作ること他にならなかった。この「いさなとり」に内包される「知」と「力」の錯綜のありようには、露伴の求めた「広い」「茫漠として分らぬ」世界の一端を見ることができているのではないだろうか。

「知」と、「知」によっては決して領略できない領域との拮抗——それは近代文学全体がその根底に抱え持っている主題でもある。従って、この「広い」「茫漠として分らぬ」世界がその後の露伴の作品の中でどのように展開されていく

のかということについては、近代文学全体に内包される重要な問題の一つとして検討を要するはずである。

注

- (1) 「いさなとり」とは「鯨を取る」という意味を表し、本来「海、浜、灘など海に関する語にかかる」(『日本国語大辞典』枕詞である。
- (2) 平岡敏夫は「露団々」と「いさなとり」の類似点を指摘しているが(捕鯨の記述や「愛女」溺愛、「愛女を得た年齢」など)、小論ではむしろその「捕鯨」形態の違いについて考察し、そこから当時「いさなとり」が書かれたその意味を探りたいと思う。
- (3) 「松富の隠居というのは、代々平戸生月島を中心とする捕鯨業益富組を支配する又左衛門という実在の人物で、紀州の太地組と併称される鯨大尽であった。」(三瓶達司「いさなとり」『歴史小説論叢』新典社 昭62・11)
- (4) 益富組は一七二五年突組として開業、一七三三年網取り法に改め、文化年間(一八〇四〜一八一八)そのピークを迎えるが、一八六一年捕獲量激減のため一時廃業。明治二年再興するが、明治七年遂に終了(生月町島の館展示年表などを参考とした)。
- (5) 彦右衛門の東京見物の記述を参考に(例えば歌舞伎座の開場が明治二十二年十一月であることなどから)物語現在を掲載時の明治二十四年頃と推定し、逆算すると彦右衛門が生月、壹岐の「いさなとり」だったのは一八四三から一八七〇、一年頃と推測できる。
- (6) 『勇魚取絵詞』は「肥前生月島に本拠を置く江戸期最大の鯨組、益富組の捕鯨を描いたもので、『鯨肉調味方』と合わせて三冊一組で出版されている(福本和夫『日本捕鯨史話』法政大学出版 昭35・7)。なお『勇魚取絵詞』が「いさなとり」の典拠であることは平岡敏夫の研究(前掲)によって明らかにされた。
- (7) 成立事情が複雑で、所説あるが、正本刊行は天明五年となっている。
- (8) 鯨組の労働組織は「沖場」(海上)と「納屋場」(陸上)に大別できる。「沖場」は、漁場で鯨を捕獲する過程であり、「納屋場」は、出漁までの前細工過程と捕獲した鯨の解体・加工の過程である(鳥巢前掲書)。「納屋場」には「定雇」



として「支配人、手代、若衆、定日雇」などがおり、「沖場」は「刃刺、刃刺見習、平かこ（普通水夫）の三階級」（福本前掲書）から成っている。

(9) 注5参照。

(10) 平田由美はこのような語り手を「読本作者さながらに物語世界のあちらこちらで因果宿縁を読者に説かんとする作者」(『近代文学におけるロマネスクの承譜―露伴の『語り』をめぐる―)『解釈と鑑賞』昭53・5)と呼びそこに「西鶴はもちろん、読本や談義本など〈語りの文芸〉に固有の説話文体的要素」を見ている。

(11) 寛政六年に刊行された『西遊旅譚』は江漢の西海旅行の記録(天明八年―九年)であるが、その後『図画西遊旅譚』(享保三年)として再版され、更にそれが改訂補筆され文化八年『西遊日記』は成立した。

\* 「付記」本稿は一九九七年度修士論文、及び一九九八年度芸文学研究会(六月十七日)において報告した口頭発表に基づいている。論成稿にあたって、多くの貴重な御助言を下さった方々に感謝の意を表したいと思います。また資料に関して(図1)は長崎県立図書館に、(図2)は生月町博物館島の館に御協力を頂いた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。なお、本文の引用は全て岩波書店『露伴全集』第七卷(昭53)によっている。(その際、旧字は新字に改め、振り仮名は適宜省略した。)一九九八年七月四日、脱稿。